

## 就活戦士ハルカ

### 【あらまし】

一生を左右する就職試験。筆者、西山遥花(仮名)は、思い描いた未来を実現させるため、全力で挑んだ。学生団体を率い、人脈を築き、日に日に期待が高まっていく。「私のやっていることは間違っていない」、「内定はすぐそこにある」そう思っていたのに、たった一通の不採用通知が全てを打ち砕いた。気が付けば、カルト化の渦に呑み込まれていた。

頑張れば頑張った分だけ報われる学生生活にピリオドを打つ時、努力より利益を優先する社会の怖さを思い知った。世間では語られない就職活動生の努力の奇跡が、社会の闇を映し出す。

### ●小見出し

焦りの中に差し出された光

焦りから希望へ

「仲間」がいる

加熱していく想いと行動

形を変えていく就職活動

就職活動のカルト化

露わになっていく「からっぽ」

私は高校を卒業し、大学進学を選んだ。学生生活を送る中で、高校生の頃から、「キャリアウーマン」に強い憧れを抱いていた。パンツスーツを着こなし、ヒールを鳴らしながら颯爽と歩き、土日休み返上で五時以降も仕事をこなす、私もそんな女性になれたら素敵だと、想像を膨らましていたのだ。

大学二回生になった頃から、日本のビール市場で多くの利益を上げている、ビール会社に就職したいと強く思うようになった。その理由は二つ。一つ目は、私自身がその会社の商品が好きであったため、営業として多くの人に伝えたいから。二つ目は、私自身の可能性を多方面に広げたいことができるからだ。その会社では、入社して五年間は営業を担当し、総合職試験を通過すると、商品開発や販売促進というような市場に対して行う仕事や、人事や総務など会社の内部に対して行う仕事など、働き方が様々だった。

私は大学三回生になり、そろそろ「就職」を意識しなければならなくなった。その頃には、ビール会社への思いや、将来に対するヴィジョンは一層増しており、また明確なものになりつつあった。

平成二十年九月、夏休みも後半を迎える頃、私は学内のキャリアサポート課に初めて出向いた。室内にいた係りの人に、「わたくし、K学科の、三回生の者なんですけど、就職の相談に乗って頂きたい、ここへ来たんですが、どなたか

お手すきの方いらっしゃいますか？」と尋ねた。するとその係りの人に、

まだ、あなたたち三年生はいいよ。この時期は、あなたたちの先輩の四年生がやつてるぐらいだから。三回生に向けてはこちらから連絡があると思うので、それまでは待つて下さい。

と言われた。確かに、室内を見渡すと、スーツ姿で資料に目を通している人や、面談担当者と話し込んでいる人、「私、まじやバインだけど！ どうしたらいいのかわかんらん」と、担当の女性に嘆いている人もいた。茶色い髪に派手な化粧に、サンダル姿の私と同じように、その人の存在もとても浮いていた。

しかし私は、「君たちまだ三年生はいいよ」という言葉をとても軽率に感じた。学生自ら就職に対してきちんと目標を持つて始めようとしているのに、「まだ早い」と足止めさせる意味が分からなかったし、「私は大手企業に就職したいから、早く始めて情報収集をしようと思つてここに来たのに！」と、この課に対して怒りの混じった感情もあった。結局、その日は何の収穫もないまま帰宅した。同年同月の中旬、私は大阪で開かれた就職セミナーに、友人から誘われた。このセミナーへの参加をきっかけに、私の就職活動は大きく動き出した。

## 焦りの中に差し出された光

このセミナーに私を誘った友人、佳奈美(仮名)は、私と同じく名古屋出身で、大学進学と同時に大阪に行った。佳奈美は、積極的に就職活動生を支援しているベンチャー企業との接点を多く持ち、また彼女自身も多くの学生を引き連れ、学生団体を運営していた。私が就職活動に対して思っていたことや、学校のキャリアサポート課でのことを佳奈美に話すと、「名古屋はまだで内向的だし、本当に遅れてるよ！まして、はるかG大だから、学校からそういう扱い受けて当たり前だよ。つか、やりたいことが明確なら、自分で人脈作って、自分で開拓していけばいいじゃん？今度、関西の学生のすごい子たち紹介するよ。私の周り、まじでヤバイから」と言った。

彼女が言う「すごい子」とは、学生で起業をしていたり、就職活動を大学三回生になった頃から始め、多くの企業の採用担当者と接触を図っている学生たちのことだった。私は、一気に彼女のその話に興味を持った。そして、「学校の扱いも適当だし、この際待っても仕方ない」と思い立ったのだった。

そして、就職セミナーに誘われ、初めて参加したのである。セミナーでは、大学三回生の学生が対象となっており、会場の入口で、氏名と学校名を名簿に記入をする形式になっていた。私も氏名と学校名を書いたのだが、ふと上の段を

見ると、関西大学、関西学院大学、同志社大学や、滋賀県の立命館大学からも土日の休みを利用して参加している学生がいることがわかった。セミナーは、二〇一〇年の企業採用傾向やその対策についての講義が一時間、実際に、そのセミナーを支援しているベンチャー企業の人事担当者による集団面接練習が一時間設けられ、計二時間に渡って開かれた。

そこに参加していた学生は、五十人近くいた。前半を終え、後半の面接練習が行われた。まず五十人を半分の二十五人に分けて、さらにその二十五人も五人前後に分けて、五つのグループを作った。そして、他のグループの学生が人事担当者から質問を受けている間、その様子を別のグループの学生全員で客観的に見る、という活動をした。

私は面接練習など初めてで、全く話がまとまらず、失敗に終わった。まだ実際の選考が始まっていない中の面接練習だったため、ほとんどの学生が、たどたどしく話していたが、中にはきちんと用意している学生も見受けられた。そして最後に人事担当者が、

君たちは、こんなに早い段階から就職活動に意欲的に取り組んでいるということに、まず自信を持つて下さい。現段階で、できなくて当たり前です。面接では、「緊張に慣れる」ということも、自分を発揮するに当たって大事なことなので、まずは練習で緊張に慣れて下さい。就

職活動をやっていく内に、自分のアピールポイントも自分で気付き始めるし、内容はどんどん良くなるので大丈夫です。

と言い、そのセミナーは終わった。私はセミナーに参加して、「大阪の学生はもう就職活動を始めているのか」、「こんなに企業に密着して情報収集しているのか」と、とても感化された。佳奈美が言う、「名古屋は遅い」という意味がはつきりと分かり、一気に焦りを感じた。そして、「私が目指している企業の選考には、きつと今日来ていた、名のある大学の子たちが集まる。私も今から就活やらなきゃ！」と奮い立たされ、自ら「就職活動」に飛び込んでいった。

### 焦りから希望へ

私は、大阪でのセミナー後、「名古屋でも、こういう活動してる子いないの？」と佳奈美に尋ねた。すると、「去年、就職活動の学生団体やってた人を紹介するから、その人とLINEで連絡とりなよ？ はるか人も人脈たくさん作って、色々な企業の人とコネクション持った方が絶対有利だよ！」と佳奈美は教えてくれた。続けて、「今日のベンチャー企業の人、たぶん名古屋にも出張とかで行くことあるから、絶対にメールしときな」と言われた。

当時の私は、新しい世界に魅せられており、「佳奈美の言うことは間違いない」と思った。そしてその晩、私は、ベンチャ

ー企業の方に、メールを送った。「名古屋でもこういったセミナーを開催して下さい」と綴り、最後は「その際には、連絡を下さい」と締めくくった。

そして私は早速、佳奈美から紹介してもらった「就職カレッジ(仮名)」という学生団体の関西支部の代表に連絡をし、これまでの経緯を説明した。その後、東海支部代表であった沙織(仮名)さんのLINEのアカウント名を教えてもらい、沙織さんのLINEページにたどりついた。

「いきなりのメッセージ、大変申し訳ありません。私はG大学の三回生、西山遥花と申します。就職カレッジ関西支部の代表の方から、ご紹介頂きました」と書き始め、私も名古屋でもそういった活動をしたということ、そういう機会があれば声をかけて欲しいということを説明した文章を送った。

何の接点もない私が急に連絡をしたため、沙織さんは驚いていたが、私の行動力を評価してくれたのか、喜んで引き受けてくれた。また、沙織さんは、「はるかちゃんと同じG大の四年で、すごい人いるから、紹介するよ」と言い、N学部の先輩を紹介してくれた。その先輩は、大手の広告会社から内定をもらった人で、真里菜さん(仮名)という人物だった。彼女は、名のある大学の学生と肩を並べて、就職活動を潜り抜けていた。

同月下旬、私は沙織さんの紹介を受け、真里菜さんにメールを送った。「はじめまして、K大学の沙織さんよりご紹

介頂きました、K学部の西山遥花と申します」という内容だ。真里菜さんからはすぐに返信が届き、数日後、私は真里菜さんに会った。私が就職に対する願望や不安を話すと、まるで一年前の自分を見ているようだと言われた。私と同じ大学で、少し早い時期から就職活動を始め、同じように競争率の高い企業を目指していた真里菜さん。第一志望の企業から内定をもらった真里菜さんは、私にとって「希望」だった。

「はるかちゃん、いきなり自分から就職カレッジの関西代表に連絡取って私の所まで辿り着くって、相当行動力あるよね。今からやっつけていけば絶対に大丈夫だよ」と言われ、その言葉に何の疑いを持つことなく、「すごい人と知り合えて良かった」と思った。

その会話の中で、真里菜さんから、学生団体の運営をしないか？ という誘いがあった。真里菜さんは、

就活してた時に『Beyond』（仮名）っていう、G大生のための学生団体を立ち上げたんだけど、はるかちゃん引き継いでくれない？ さおちゃん（沙織さんの呼び名）からはるかちゃんの話聞いた時、絶対にはるかちゃんに引き継いで欲しいって思ったんだよね。

と言った。真里菜さんに一気に魅了されていた私は、断る理由などなかった。しかし、「引き継ぐ」という形で用意

された席に、「偉大なる真里菜さんが創ったもの、私で大丈夫か？」と少しプレッシャーを感じた。私は人に頼まれたことは断れない。周囲の期待に応えなくてはならない、と過度に意識してしまうのだ。だが一方で、周りの期待に応えることで、私自身の存在価値を見出していた部分もあり、今回はその気持ちが強かったため、喜んで引き受けた。この時、「真里菜さんと同じような道を辿れば、私も、絶対に就活成功する」という根拠のない自信さえ生まれていた。

後日、沙織さんから一通のメールが届いた。「R・エージェントの人が就職活動を意欲的にやっている就活生を探してるんだけど、良かったら、はるかちゃん紹介していい？」という内容だった。就職活動が一歩先へ進み出したんだ、と私は喜びを感じ、沙織さんの誘いを喜んで引き受けた。

数日後、R・エージェントの人事課に所属している、岡田さん（仮名）という方に会った。岡田さんは、会うなり私を普通の喫茶店へ案内して、一対一の会合が始まった。岡田さんからの質問内容は、どういう業界を考えているのかということから始まり、私が志望していた業界の採用傾向など、就職に関する話が主だった。しかしそれ以外に、「はるかちゃんは大学で何してるの？」、「やっぱ就活って不安もあるよね？」という質問も多々あった。「企業」対「学生」という堅い感じではなく、先方が「はるかちゃん」と呼ぶほど、雑談のような雰囲気だった。

その場の終わりに岡田さんから、「何か質問はある？」と

尋ねられた。私はとっさに、「私と話していて、どういう印象を受けましたか？」と聞いた。この頃ちょうど自己分析と他己分析をしていた私は、自分自身の客観的な見え方が気になっていた。

岡田さんは、「はるかちゃんはとても落ち着いているし、行動力があるね。学生団体を引き継いで運営していけば、今後良いエピソードが生まれると思うから、頑張つて。あとは、話しの手順が少し曖昧だから、頭の中で整理して伝えられるようになると思う」とアドバイスをくれた。当時の私の状況に的確なアドバイスをくれる、岡田さんの言葉の一つ一つが、私の不安を取り除き、「私のやっていることは間違っていないんだ」と正当化させてくれていた。

### 「仲間」がいる

私は就職活動を控えた、M大学の直美ちゃん(仮名)という子にも連絡を取った。大阪のセミナーと一緒に参加した佳奈美の友人が、「この子は、自分の大学で学生団体を立ちあげて、今、就活頑張つて、なかなかすごいで！」と言つて、紹介してくれたのだ。

平成二十年十月上旬、私は直美ちゃんと初めて会った。彼女の通うM大学は、一般企業に対しての学校側のサポートが少ないらしい。それを理由に、一般企業への就職を希望する学生のための学生団体を立ち上げたいと、学校に要求し、活動場所も正式に確保して、自ら運営している人であ

った。そんな彼女の話を聞き、私も学生団体を運営していく立場になったことを告げ、活動内容の取り組み方などを教えてもらった。私は直美ちゃんの想いに重なるものを感じ、「私は一人じゃない」という安心感を覚えた。

直美ちゃんとの面会を終えた後、直美ちゃんから誘いを受けていた「一〇〇飲み」という会に参加した。この「一〇〇飲み」とは、同じように就職活動を控えた様々な学生が、企業の情報を交換し合い、お互いの意識を昇華させる食事の場であった。この「一〇〇飲み」には約四十人の学生が参加していたが、名古屋で名のある大学の学生も多く、起業している学生や、私が受けた大阪でのセミナーのような会に、名古屋でも積極的に参加している学生もいた。

その中の会話は、とても刺激的だった。インターンシップでの話や、自分たちの先輩から聞いた話など、「就職」に對しての話が飛び交っていた。そして、数時間後にその会が終わると、学生たちが一堂に立ち上がり、名刺交換が始まった。「一〇〇飲み」は、私の心をさらに高揚させた。「すごい。私が求めている就職活動生ばかりだ」と思った。

G大では、「はるか、もう就活始めてるの？ すごいね」と言われるが、ここでは、「就職活動を意欲的にやって、いい情報を集めて、第一志望の企業に絶対就職したい！」という私の思いを理解してくれる、同じ感覚の学生たちが大勢いる。この辺りから、「(A)就職活動を意欲的に頑張っている子」と「(B)就職活動を自分のペースでやっている子」という

二つのランクが私の中に存在し、自分が(A)ランクに属していることに満足していた。

そして、「私は、G大の学生の中でも早くから動いている」ということに妙な優越感を覚え、「意欲的に頑張っている子」という勝手に作り上げたグループに、ますますのめり込んで行った。「内定」というゴールに辿り着きたいという思いが、日に日に強くなった。しかしその思いは、やがて形を変えていくものとなる。

### 加熱していく想いと行動

平成二十年十月、私は「一〇〇飲み」で知り合った多くの学生や、沙織さんや真里菜さんといった様々な内定者によつて開かれた、大阪でのセミナーと似たようなセミナーに毎週参加していた。どのセミナーでも、やることはほとんど同じだ。企業の採用担当者が出向き、一つお題を提示して、いくつかのグループに分けられた学生同士でグループ・ディスカッションや面接練習を行うというものだった。そして最後に、どのグループが良かったかを企業側が選び、それぞれのグループの良かった点と改善点を、企業側がフィードバックをするものだった。

また、違うセミナーでは、学生同士で少人数グループに分かれて、各テーブルにその企業の内定者が一人入り、お互いの自己PRや、学生時代に頑張ったことを発表し合い、発表した学生以外の学生と、そのテーブルについて内定者

からのフィードバックをもらうという内容であった。

各セミナーの後には必ず、その会に参加した学生や、内定者、さらには、企業側の社員たちとの名刺交換が行われた。私も「一〇〇飲み」以降、他の学生と同じように名刺を持ち、積極的に名刺交換を行っていた。毎回、「わたくし、G大学の西山遥花と申します」という言葉を皮切りに、セミナーでの質問や感想を述べ、最後には必ず、「またこういった機会がありましたら連絡を下さい。次回も必ず、参加させて頂きます」と言った。セミナー後には、名刺のアドレスへ、形式的なフォームでお礼のメールを入れていた。

この頃から、私の周囲に少し変化が起き始めた。同年九月下旬、後期の授業もスタートし、同じように就職活動を控えていた同学年の学生たちが、就職活動を意識して黒髪に染め直し、仲の良い友人からは、「就活やばいね。はるか、もう始めてる?」と聞かれた。私の今までの経歴を話すと、「すごいね。もう就活してるの?」と言われた。私は、「学生団体運営することになったから、もし興味があったら、いつでも連絡して?」と言い、その場の会話はそれで終わった。

十月に入り、G大の仲の良い友人たちから、「はるかが前言ったセミナー、私も今度行きたいんだけど?」と言われてるようになった。この頃、「リクナビ」や「マイナビ」、「enジャパン」など、人材会社による就活サイトの二〇一〇年度版がオープンし、そこから各企業にプレエントリーするに当たって、簡単な自己PRをしなければならなくなった。それが

きつかけとなり、G大の友人たちも焦りを感じ始めたのだった。私はもちろん快く承諾し、「就職に対して不安を感じているのは一緒なんだから、みんなで情報を共有して乗り越えようよ」と言った。私は、大学生活を共にしてきた友人たちが、「就職活動を意欲的に頑張っている子」という(A)ランクの環境に入って来てくれることが嬉しかった。

このことをきつかけに、真里菜さんから受け継いだBeyondの活動を始めた。私の活動に興味を持ってくれた友人たちが四人、噂を聞いた他の学部(の)の学生が二人、友人が友人を誘い、あつという間に十五人前後になった。人数が増えると連絡を取り合うことが難しくなったため、携帯電話から投稿と同時に閲覧ができる簡単なホームページも作成した。そして、そこにセミナーの案内を掲示し、参加者を募って出欠を確認したり、何を行って欲しいかなどのアンケートもとった。

Beyondの活動は、自己分析から始まり、面接練習や、真里菜さんや他のOGによる、エントリーシート(以後、ESとする)の添削、他大学の学生や内定者によって開かれたセミナーと一緒に参加するというような内容だった。私はこの団体を運営するに当たって、「内定者という立場ではないから、私はみんなに何も教えられない。だから、このBeyondでは、私が何かを指導するのではなく、みんなでセミナーに参加して、みんなが吸収していききたい。もちろん私はそのセミナーのきつかけ作りに努めるし、積極的にみんな

を誘う」と話した。

その言葉通り、他大学の学生や内定者からセミナーの誘いが入ると、真つ先にBeyondのホームページに記載した。そして毎回、ホームページで参加の意思を示した学生と一緒にセミナーに向き、セミナー後に、「もし、またこのような機会がありましたら、Beyondのメンバー全員で参加させて頂きますので、連絡を下さい。宜しくお願い致します」と一人で挨拶をして周り、Beyondの簡単な「営業」を行っていた。

この頃、私の目標は「自分のための就職活動」から、「自分+みんなのための就職活動」という形に変わり始めていた。セミナーに誘ったBeyondの仲間たちからは、「学校の説明会やマナー講座だけでは足りないよね。何だかできる気がしてきた。ありがとう、また誘ってね」と、とても良い反応が返ってきた。私の行動を支持してくれる「仲間」がいる、そしてその「仲間」が、私の行いを評価してくれる。私には、自信が生まれていた。

### 形を変えていく就職活動

私は、今まで述べたように、多くの学生や内定者、さらには企業の人事担当者との接点を持つようになり、「人脈」は以前と比べてかなり広がった。そして毎週セミナーに向き、さらなる人脈作りに励んでいた。個人的な活動としては、興味を持った会社にパソコン上でプレントリーを済ませ、



その企業の人事部から一斉送信されるメールに軽く目を通すくらいだった。

ES提出を求める企業はまだなく、時事問題に関する本を読んだり、筆記試験の勉強をする程度で、ほとんどの時間を、学生団体を運営するのに当てていた。OGへのアポイントや、次回のBeyondでやることの打ち合わせ、セミナーへの参加、そしてそのセミナーで知り合った学生たちとのコミュニケーション作りというように、就職活動の軸足が大きく変わりつつあった。

平成二十年十二月上旬、とあるセミナーでのことだった。この日は、日本全国で演説会を開いているベンチャー企業の社長、河原氏(仮名)の演説会に、Beyondのメンバーを三人連れて参加した。演説内容は、就職活動生に見受けられる、学歴コンプレックスという不安や、他の就職活動生と比べた時に覚える自分自身への劣等感など、学生が感じやすい「不安」に焦点を当てたものだった。

「君たちは、なぜここににいるのか？ それは、君たち自身が就職活動を頑張っているからだ」と河原氏は言った。一生懸命頑張っているからこそ、不安が生まれる、けれどそれはやがて自信にも繋がるから、自分がどうありたいのかということを常に考えるべきだ、という話だった。

続けて河原氏は、「面接官は何も、初めからこの人を落とそうと思つて質問をしているわけではない。落とそうと思つているなら、ESで落ととしている。面接官は、ただ君たちの

ことを知りたいと思つているだけなんだよ」と話していた。心の中を見透かされたかと思つた。この当時の私は学歴に不安を感じており、いくら面接練習を重ねても、「こういうことを言ったら、イメージが悪いから」と私自身を大きく取り繕つて表現し、その殻からなかなか抜け出せずにいたのだつた。

そんな私が演説を聞き、「みんな同じ不安を抱えているんだ。誰からも見放されていないんだ」と思つた。今まで感じていても、なかなか言い出せなかったモヤモヤが一気に晴れた気がした。河原氏によつて助けられたとさえ、感じたのだつた。

そのセミナーの直後、少し変わった風景が見られた。どのセミナーでも、名刺交換をする学生はだいたい同じ顔ぶれなのだが、このセミナーでは、いつもと比べて倍の学生が河原氏の元を集まっていた。それほど、学生の「不安」について触れた内容の演説は、多くの学生に希望をもたらしたのだろう。私もその列に並んで、いつものように感想を述べながら名刺を渡し、Beyondの営業をした。この時の私は、「この人の話を聞いていれば、余計な不安に襲われることなく、自分らしさを保つて就活ができる。この人の支持があれば大丈夫」という、変な安心感に満たされていた。

河原氏によつて何らかの影響を受けた学生は多く存在していた。河原氏が就職活動生を対象に書いたブログを読む者もいれば、河原氏のエッセイを熟読する者もいた。この光

景は、私たち二〇一〇年度就職活動生だけに当てはまるものではなかった。毎年同じように全国を回って演説を行っていた河原氏には、私たちの前の代の学生や、さらにもっと前の学生にまで、言わば「信奉者」が存在していたのである。私も同じく河原氏の「信奉者」となり、大きな感銘を受けていたのだ。

さらに私は、あるセミナーで田中くん(仮名)に出会い、新たなコミュニケーション作りに出向いた。彼は、毎月第一土曜日の夜に、名駅周辺でゴミ拾いを行っているという人物だった。「一〇〇飲み」のように、飲食代というお金をわざわざ使わなくてもできる、学生同士のコミュニケーション作りはないかと考えて、思いついたのがゴミ拾いだということ。私は、彼の思いに興味を持ち、そのゴミ拾いに何回か参加した。本当にただ話しながらゴミを拾うという単純作業で、一時間半ほど歩いてゴミを拾い集めた。ゴミを拾いながら、「一〇〇飲み」での会話のように、将来に対する夢や、就職活動中に生まれた不安を話し、企業の情報交換もして、多くの学生と仲を深めていった。

一方で、私は一番志望していた企業の内定に不安を感じていたのも事実である。どこかで総合職を別の階級の世界だとか、地に足が着かない世界だと感じていたところがあつた。そんな時、真冬にアルバイト中、外でお客さんの呼び込みをやっていると、一人のホームレスのおじさんに、「お姉ちゃんも寒い中大変だね」と言われた。その言葉は、就職活

動中、風船のように漂っていた私を、おじさんが引っ張ってくれたようで、少しそれに安堵した。

そこから、「社会」に属するとは反対の生活をしているホームレスのおじさんに興味を持ち、ホームレスのおじさんたちと同様に、私もゴミ拾いをやってみた。そして、そこで集めた空き缶をおじさんを持って行くと、気さくな様子で迎えてくれた。一緒にお酒を交わし、なぜホームレスを好んでしているかなどを話した。そこで私はいかに企業に踊らされているか、はつきりと認識できた。

そんなある日、私の高校時代の友人が、「マウンテンデュー」という飲料を日本でも、もっと流行らせたくて、今地味にプロモーション活動してるんだけど、一緒にやらない？」と誘ってきた。友人がアメリカに留学をしていた際によく飲んでいたその飲料が、日本ではあまり見かけられないのは残念だと思い、プロモーション活動を開始したそうだ。そのマウンテンデューという商品が、私もエントリーしていた、サントリーフーズ(株)から発売されたため、自分自身の就職活動に少し有利になるのではないかと考え、私はその話に乗った。

各セミナーで出会った学生には、マウンテンデューという飲料の販売促進を学生間でやっていると伝え、サントリー・ホールディングス(株)の説明会が終わると、真っ先に人事課の社員の元へ出向き、「私は今、サントリーフーズで発売されているマウンテンデューのプロモーション活動を行っていきま

御社の酒類と合わせた提案もしています」と言って、名刺を渡していた。

担当者は、「ありがとうございます。弊社の商品に愛情を注いでくれているのであれば、その思いを是非ESでも見せて下さい」と言っていた。今思えば中身の無い会話だが、当時の私は、「憧れのサントリーの社員と話せて嬉しい。もつと頑張ろう」とサントリーの社員と少し近づけたと思っていた。しかし、実際の活動内容と言えば、学生間で試飲し、感想をウェブサイトのアンケートで回収するというだけで、特に進展もなかった。

ゴミ拾いやプロモーション活動のように、就職活動のESや面接で使えそうな、少し変わったネタがあれば、私は何にでも食いついていた。この頃の私は、多くの学生から様々な刺激をもらい、「人と違ったことをして、それに評価をもらえるようになれば、立派なエピソードになる」と思い始めていた。

### 就職活動のカルト化

私の就職活動は、ここまで述べてきた通り、人脈作りに励み、そのコミュニティの中で自分の存在価値を高めていきたいという思いに変わっていた。私を取り囲む人たちは大手企業に内定を受けている人たちばかりだから、この人たちと同じことをしていれば上手くいくだろうという、何の根拠もない自信に満ち溢れていた。そしてこの頃、前述した

(A)、(B)二つのランクのピラミッドが、実は、「(S)内定者」という最上層を持った、二層構造だったことを知った。

私は(A)ランクに属しながら、(B)ランクに属する仲間を(A)ランクに引き上げて動員することで、私自身にも相手に、満足や希望や自信という「利益」が得られると思っていたし、それが最上層に位置する「(S)内定者」というランクに近づく一番の方法だと考えていた。さらには(S)ランクに接触することができれば、おのずと密着している企業から厚い信頼や評価をもらえると思っていた。そして、(S)ランクで得た企業側からの信頼や評価は、やがて自分が二〇一〇年度に入社をした際、全てゼロからスタートさせる同期入社の中の社員たちより、企業活動を一步先に理解できているだろうというほどまでに思っていた。それ程このピラミッドでの(S)ランクへの憧れは強いものだった。

いま思うと、このピラミッドは、企業側と学生側という二つがうまく作用・反作用しなければ成立しない。そして、「みんな不安に思っていることは同じです。こういうセミナーを通して学生のみなさんが、一歩踏み出せるように、こちら側もサポートしますので、是非頑張ってください」という「企業から見捨てられていない」という安心感から、どんなに名のある大学の学生でも、抜け出せなくなってしまうのであろう。

この活動の中心部にいた頃の私は、他の就職活動生に目を向けなかった。最上層にいる内定者の通って来た道が正

しいと思い、その背景にある企業も、「なんて就職活動生に対して温かいのか」とさえ思っており、就職活動をゼロから始めた私にとって、そこにある全てが真実で、不安を拭ってくれたり、行いを評価したりしてくれる環境はそこにしかなかったのだ。その環境に身を置いているということだけで、自分の存在価値を見出していた。

つまりここでは、ピラミッドの(A)ランクに属していた私のような学生は、企業側にのめり込むため、企業側はそれを助けると共に、利益も得ているといった双方のバランスが取れているのだ。その微妙なバランスから成り立つピラミッドに身を置き、とても居心地のいい環境に染まつている様子は、まるでどこかのカルト集団に属しているかのような。つまり、私の就職活動は「カルト化」していった、と言える。

学内のキャリアサポート課に数回しか出向かなかったというところにも、私の「カルト化」は現れている。一番始めに出向いた際、私は「三回生だからという理由で除け者にされた」と強く感じ、キャリアサポート課に頼っているのはダメだと思うようになり、自分が開拓していった極めて「狭い」コミュニティのみを信じるようになった。行きたい企業に入社するためには、どんどん自分のペースでやっていかなくては絶対に無理だと決めつけ、他は受け付けなかった。自分が信じているものだけに強く依存し、そこで不安を解消すると言ったように、「就職活動のカルト化」が進んでいった。

そればかりか、友人をセミナーに誘い込み、「みんな就職

に対して不安を感じているのは一緒なのだから、みんなで情報を共有して乗り越えよう。自分の入りたい企業が明確であれば、みんなと同じペースでやる必要はないよ」と訳の分からない根拠で、相手の懐に入り込み、さらなるセミナーの勧誘を行う。そして実際にセミナーに参加した友人は、大阪で初めてセミナーに参加した私のように感化され、私に良い反応を返してくれる。そうすることで、自分自身の行いを正当化させ、「カルト集団」にさらなる利益をもたらそうとする。私は、前にも述べたように、周りの期待に応えることに自分の存在価値を強く見出していたため、そんな友人たちの反応を見て嬉しくない訳がなかった。

こうして私の就職活動の「理念」は随分と変形しつつあったのに、そのことに一切気づかなかった。まだ何が向いているのか分からないため、まずは自分自身について知るべく多くの説明会に参加したり、やりたいことを職にしようと就職先を探したりするなど、活動する個人が主体となる本来のあり方から、いかに多くの学生と就職活動生を支援する企業との関係を図るかという、言わば「外面」をとりつくるあり方に変形していたのだ。

ここに、大学三年次の就職活動を始めた頃の私をイメージさせるデータがある。他己分析として、MIX を通し、「私はみなさんにとって、どんな人物ですか?」と意見を募ったのだ。高校時代の友人、大学の友人たちからのコメントが、当時の私を彷彿させる。

コメントは二十四人から返って来たのだが、その内十一人が、「自分の意見を持っている、意志が強い」と答えた。そして、次に多かったのは、「姉御肌、リーダーシップがある、統率力がある」という返答で九人。「しつかりしている」、「気配りができる」と答えた人は八人だった。この三つの返答は、もちろん元々幼い頃から持ち合わせていた性格であったが、中学、高校時代はここまでではなかった。

この質問で、「素直、寂しがり屋、人の想いや自分の感情をため込み過ぎて、たまに一気に崩れる」と、本当の私の姿を述べてくれたのは、高校時代の友人ただ一人だった。彼女だけが、私が自分の意思で動いているのではなく、周囲の人たちによって動かされている、ということを知っていたのだ。私自身を突き動かしているのは「もう一人の私」であり、本当の自分は「からっぽ」だった。私に対する周囲からの評価が当時の「西山遥花」という人物を創り、さらには、その像を完璧に演じきることで、「もう一人の私」を完成させ、生きていく意味をこの就職活動中に感じていたのだった。

### 露わになっていく「からっぽ」

平成二十一年四月、私は前述した活動をしながら、自分の就職活動もしていた。私と同じような活動を行っている学生たちが、だんだんと選考が進んでいっている中、自身の就職活動というのは、全くと言っていいほどうまくいっておらず、毎日気分が落ち込んでいた。企業から毎日の

ように届く「不採用通知」に、どんどん私自身を否定されているような気がしていた。面接やESで述べるのは、全て自分自身のこと。それを「不採用」という、たった一通のメールで片付けられるということを三十回以上繰り返し返され、自分自身の二十一年間の人生までも否定されているような気分になっていた。このような気分になることは、就職活動をしている学生なら一度は感じることも言っても過言ではない。

その三十社のうち一社は、入社したいと強い願望と想いを寄せていたビルル会社であり、一気に希望を失った。その会社に入るために、会社の商品分析や関連する資格の取得、さらにその会社のOBや関係者とも接触を図り、近づくための努力はたくさんしていた。それが「不採用」という形であつさり終幕になってしまい、何も目標がなくなつた当時の私に残つたのは、焦りと不安、そして絶望だけだった。

この頃から、「自分とは何か？」ということが急に分からなくなってきたのである。周囲にそんな気持ちを抱え込んでいる自分の姿を見せることができず、余計な不安に苛まれないように、スケジュールをびっしりと詰め込んだ。そうすることで、「私は就職活動をやっているんだ」ということを自ら意識させ、不安を取り除いていたのだった。前章で述べた「就職活動を意欲的に頑張っている子」という階層にいた学生たちから、「この子はダメだったんだ」と、はじかれることが怖かったのだ。

それと同時に、散々選考に落ち続けた私は、あのピラミッドの最下層、「就職活動を自分のペースでやっている子」にも所属できていないということに気がついた。今まで七か月に渡って所属していたピラミッドから追放されるのが怖くて、「はるかちゃんはやダメなんじゃない、たまたま不採用だっただけ」と周囲に思わせるために、スケジュールを埋めなくてはならなかった。

ピラミッド内で交流を深めた学生に、「最近、どう？」と聞かれても、「最近は、〇〇会社の選考待ちと、□□会社にES送ろうと思ってる」と就職活動の予定をすらすらと話して、その友人たちからも、「はるかはずいーいから、絶対大丈夫だって」という励ましの言葉を得ており、「私はまだ見放されていない」と、ピラミッド内にいるという幻想に安堵していたのである。

面接や説明会、Beyond の活動、そして、週二、三回のアルバイトと、週に一回の学校という生活が続いた。やらなくてはならないことは目の前にたくさんあるが、自分自身の心が全くそのペースについて行けなかった。頭と心のバランスが上手く取れず、混乱していた。

当時二十一歳だった私は、夢や希望を持って、やりたいことをしていたという精神的年齢と、夢ばかりではいられない現実を知って、焦りや不安を意識し始めた肉体的年齢が交わりつつあった。さらに日本特有の「レールが敷かれた社会」に求められている二十一歳の像や、「新卒採用」とい

うくくりで選別される二十二歳の模範像が入り乱れ、その狭間で何もできない自分に苛立つてもいた。

将来やりたいことはあった。でも、もうその会社には入れない。どこかに就職しないと、新卒という特権を持つ二十二歳は終わってしまう。この次に待ちうけるのは、風あたりの強い社会だ。もう何がやりたいのか分からず、社会から求められる二十二歳という像が、当時二十一歳であった「西山遥花」を呑み込んでいくような気がした。

このようにして、ピラミッドの中に安住する「私」と、そこから排除されそうな「私」、そして、学校、家族や友人と共にある「私」がせめぎ合い、私は、憔悴しきっていた。